

## 習慣化から自立支援へ

事業所名 定期巡回ステーション八街 氏名 伊藤 晃世

### 【はじめに】

認知症の軽度の方の中には、サービスに入ることを「必要ない」と感じられる方も多くいる。その場合、介入をなかなか受け入れてもらえないこともしばしばあるが、今回はその中から服薬管理ができない方へサービス介入した事例を取り上げる。

### 【利用者の概要】

81歳女性、独居、要介護1。元看護師。未破裂脳動脈瘤、アルツハイマー型認知症、乳がん、子宮筋腫の既往あり。日常生活においては家事、炊事、買い物、近所づきあい等概ねクリアされているが、服薬においては管理ができない。薬の置き場所、飲んだことなど忘れてしまう。過去には、処方された薬が足りなくなり、受診を早めたこともある。本人自身、薬について服用忘れがあること、管理が不十分という認識は持っている。薬の管理について「まだできる」というプライドと「もうだめだ（できない）」という両方の気持ちがあり、服薬管理ができなくなっていることを受け入れられず葛藤がある。そのため介入には抵抗があり、拒否があるかもしれないと事前にケアマネからも話あり。

### 【経過】

服薬がきちんとされているのか不明であると、定期巡回に服薬確認のケア依頼あり。契約時話を進める中で、毎日来られるのは意地もあり頼りきれないということ、また近所の目も気になるという思いが聞かれた。これを尊重し、基本はテレビ電話を使用して服薬確認をし、必要に応じて訪問するという方法にすることで介入への負担を軽減することとなった。薬は朝夕2回。食器戸棚に自作の薬ケースに入れて管理している。

テレビ電話で始めてみたものの、翌日には早速薬がどこにあるか分からなくなり訪問。すぐに戸棚から見つかるが、自分で置いた場所が分からなくなってしまうので、毎日朝のみは訪問したほうが良いと判断。空袋はカレンダーに貼ることで目視でも飲んだか確認できるようにした。これを機に毎朝に訪問、夕はテレビ電話とすることにした。

開始1か月は強い拒否もなく介入することできちんと服薬することができた。空袋を貼り付けることが習慣化され、朝に飲んだかどうかを自他ともに確認できるようにもなった。ただ夕薬はテレビ電話で声掛け服用を見守りできることもあったが、飲めたり飲めなかったりまちまちだった。

ケア開始から初めての受診の後、処方された薬をなくしてしまう。受診に付き添った家

族も困惑した。結局居間の収納棚から見つかるが、それ以降も自分で薬を2階の押し入れにしまったり、手持ちのバッグにしまったりしてなかなか見つからないこともあった。

薬が見つからない度に家中探したり、ケアマネも何度も出入りするようになったりしたことで、不満と不信感を募らせてしまい、ついには「薬は自分で飲んでいる」「家中探されるのも不愉快」「近所でも（訪問が）噂になり始めていて居づらい」と訴えられた。本人から訪問を見合わせてほしいと強い希望もあり、ケアマネから家族に相談。家族からは「薬が正しく飲めなくても薬がなくても、今は精神的に安定してもらうため本人に任せてよい」と話あり、訪問はなしとし、朝夕ともにテレビ電話での確認とすることになった。

それから約1ヵ月。この間に薬の内容が変わったり追加処方に伴い一時的に1日3回の服薬が変わったりして混乱もあり、本人の依頼があれば訪問というかたちをとった。毎日の訪問を止めてからは、正しく服用がなされているか確認は取れなくなったが精神的には安定してきた。しかし、家族から、やはり薬が正しく飲めないで週1回は訪問してもらいたいと再度依頼がある。混乱を極力避けるため、曜日とメンバーを固定して伺うこととなった。1ヵ月ほとんど訪問はしなかったが、空袋をカレンダーに貼ることは自身の中でも定着。介入時より自己管理はできるようになってきた様子が伺えた。

現在は、家族の提案と協力のもと、カレンダーの日付に朝薬を貼り、そこから当日分を取って服用、服用したら空袋を貼る、ということが習慣化されている。これによって朝の薬をどこかにしまって行方不明になることもなく経過している。夕薬は戸棚で自己管理となっていて、やはりどこかにしまってしまうこともあり毎日の服用は見込めないが、テレビ電話による声掛けで意識付けはできている。

精神面については不安定のこと度も度々あり、いつまでヘルパーによって管理されるのか、介入は終わらないのかと不満は尽きない。

## 【考察】

まったく薬の自己管理ができない状態で、かつ拒否があるかもしれないと始まったケアであったが、最初の1ヵ月の訪問で「薬を忘れず飲む」ということが意識付けされ、習慣化された。さらにはカレンダーを活用することが上手いき、今では薬＝カレンダーを見てその日の薬を確認する、というところまで定着したことは自立支援にもつながったといえる。

薬については落ち着いてきたので、今後は精神面での関わりを深めていくことが必要。本人の「できる」という自負が大きいので、完全にヘルパーを受け入れることには当分時間がかかるが、本人の気持ちを受け入れ、尊重しながら今後もケアしていくことが大切である。

## 【まとめ】

サービス開始当初は、薬を忘れなく飲めるようにという大まかな目的でもって介入したが、関わりを経ていく中で、本人の中に「今日の薬を飲む」という日々のルーティーンを根付かせることができた。毎日の訪問ができなくなり、テレビ電話での「飲んだ」「飲まない」の聞き取り、声掛けはその場での確認ができなかったためにこちらとしても不安があったが、毎日繰り返して行うことで、気付けば本人への意識付けとなっており、自立支援にも繋げることができた。認知症の方との関わりにおいて、習慣化することの重要性を改めて感じた事例となった。